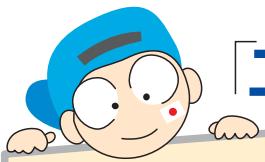




発行者：ユニセフ子どもネット事務局 財団法人日本ユニセフ協会 広報室 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
電話：03-5789-2016 フax: 03-5789-2036 電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

unicef 

財団法人日本ユニセフ協会



「ユニセフ子どもネットニュース」

2001年2月21日にうまれた「ユニセフ子どもネット」。昨年は、ユニセフが世界的にとりくんだSay Yes for Childrenキャンペーンを日本でおこなうために資料をつくり、署名活動をしたり、12月に横浜でひらかれた「第2回子どもの商業的搾取に反対する世界会議」に向けて学習会や合宿セミナーをおこなったり…、世界会議の日本代表に選ばれたネットワーカーは本番でも大活躍しました。

ユニセフ子どもネットの活動は、世界の注目も集めています。今年発行されるユニセフの年次報告などにも、その活動がとりあげられるかもしれません。日本は、知識や情報を学ぶことには熱心だけど、自分の意見を世界に向けて発表したり、この地球をよりよいものにするために率先して活動することにはあまり熱心ではないと思われてきました。ユニセフ子どもネットが、「子ども



創刊号を届けします!

の権利」にかかわる世界的な運動に積極的に参加することで、「日本の子どもは、世界の問題を考えたり、発言したり、行動したりするぞ」というメッセージを世界に伝えることができるでしょう。

ユニセフ子どもネットは世界のことを考え、世界に向けて活動します。その使命は、「この世界を子どもたちが健康に幸せにくらせる世界に変えていくこと」

のために、世界の問題に関心を持ち、学び、自分の意見を持ち、その意見を世界に発表していくことが必要です。この「ユニセフ子どもネットニュース」がそうしたことを実現し、みなさんの情報交換の場になることを願っています。このニュースレターはネットワーカーのみなさんがつくっていくものです。いっしょに大きく育てていきましょう。

TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS TOPICS

国連子ども特別総会がひらかれました

各国の子どもたちが世界に向けてメッセージ



© UNICEF/HQ02-0119/Susan Markisz

子どもたちが世界をつくるために何をしたらよいか話し合う「国連子ども特別総会」が5月8日から10日までアメリカ・ニューヨークの国連本部でひらかれました。60か国以上の総理大臣や大統領をはじめ、合計6000人以上が参加しました。

本会議の前、5月5日から7日まで、138か国から362人の子どもたちが参加して「子

どもフォーラム」がひらかれ、子どもたちだけでの話し合いもおこなわれました。ここでまとめられた子どもたちのアピールは、8日の本会議で発表されました。子どもが国連総会で演説するのはこれがはじめてのことです。

「わたしたちは世界の子ども。わたしたちは搾取や虐待を受けている子ども。わたしたちはこれまで声を聞いてもらえることのなかった子ども。…わたしたちは子どもにふさわしい世界がほしいのです。」こうはじまった子どものアピールは、子どもにふさわしい世界はどんな世界かをひとつずつ説明し、最後に「おとなはわたしたちを未来といふけれど、わたしたちは今ここにいる現在でもあるのです。」としめくくりました。

その後、世界各国のリーダー達は熱心な議論をし、これから世界の子どもたちのためにはやくそくを決めた約束を決めて閉会しました。

この会議については、次号のユニセフ子どもネットニュースでくわしくお伝えします。

総会で子どもたちが発表したアピールの全文やアンさんとのQ & Aなどをホームページでお伝えしています。 <http://www.unicef.or.jp>

- もくじ
- 「ユニセフ子どもネットニュース」創刊！ ユニセフトピックス 1
 - 第2回子どもの商業的搾取に反対する世界会議 (in 横浜) でユニセフ子どもネットワーカー大活躍！ 2-3
 - 地図で見る世界の子どもたち 「健康なくらしと教育」 4-5
 - アフガニスタンの子どもたちは今 ~子どもネットワーカー記者 キャラクターにインタビュー~ 6-7
 - REPORT&INFORMATION 報告とお知らせ 8

ち す み せ かい 地図で見る世界の 子どもたちのようす

2002年世界子供白書から

健康に生まれて、
元気に育って、
学校に行く
のは、あた
りまえの
こと?



©UNICEF/HQ99-0990/Jim Holmes

栄養が十分足りていない子どもたち



5歳になる前の子どものうち、体重が標準よりも軽い子どもの割合が25パーセント以上の国(1995-2000)

*いま、世界では1億4,900万人の子どもが栄養不良(栄養が十分に足りていないこと)です。その3分の2はアジア地域の子どもたちですが、アフリカでも栄養不良の子どもの数は増えています。



©UNICEF/HQ93-1981/Giacomo Pirozzi
栄養不良は、定期的に体重をはかって記録することで、早く見つけることができます。

学校に行けない子どもたち



小学校に入学したり、通ったりできない子どもが60パーセント以上いる国

*学校に通える子どもたちの割合は高くなってきていますが、それでもまだ1億人以上の子どもたちが小学校に通えずいます。そしてそのうちの57パーセントが女の子です。



©UNICEF/HQ93-1981/Giacomo Pirozzi
栄養不良は、定期的に体重をはかって記録することで、早く見つけることができます。

わたしが6年間通った学校は、ずっと汽車の車両だった。とても勉強できるようなところではなかった。窓にガラスはなく、夏は暑すぎ、冬は寒すぎた。手袋もなくて、書くこともできなかった。1時間か2時間、寒さの中で授業をすると、先生は私たちを家に帰してしまった。

イサ、17歳 アゼルバイジャン

学校に行きたい 世界の 子どもたちの 声

ずっと石切り場ではたらいていたの。何かしら理由をつけでは、いつもなぐられた。とうさんの借金はいつまでたってもへらなかった。何年もはたらいてようやくNGOの人びとが助けてくれたの。今は、教育を受けることがどんなに大切かわかるわ。今なら、だれもわたしやわたしの家族に、何も書いていない紙にサインさせて奴隸のような仕事をさせたりできないもの。

カウシャーリヤ 14歳 インド

13歳のときにお金がなくて学校をやめたわ。
15歳になって学校にもどろうと思ったけど、
もう受け入れてもらえなかつたの。

エイリン 15歳 コスタリカ

食べるものも十分にないのに、
どうして学校に行けるという?
街で物売りをする子ども 12歳
エチオピア

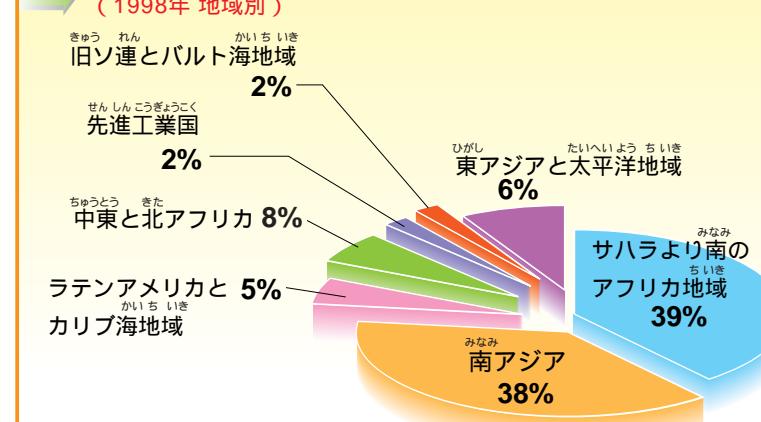
いい教育を受けられる特権みたいなチャンスに恵まれた子どもも、そういうチャンスを与えることができる人もいる。だけど、そういうチャンスを奪われて、はたらいている子どももいる。親から見れば、勉強するかわりに、はたらいてお金をかせいできてくれればありがたいでしょう。だけど、勉強することは将来の家族のためになるのです。いろいろな意味でお金には代えられないようなものに。

ディーブティ 17歳 インド



©UNICEF/HQ99-0623/Giacomo Pirozzi

小学校に通っていない子どもはどの地域に多いのだろう? (1998年 地域別)



女の子

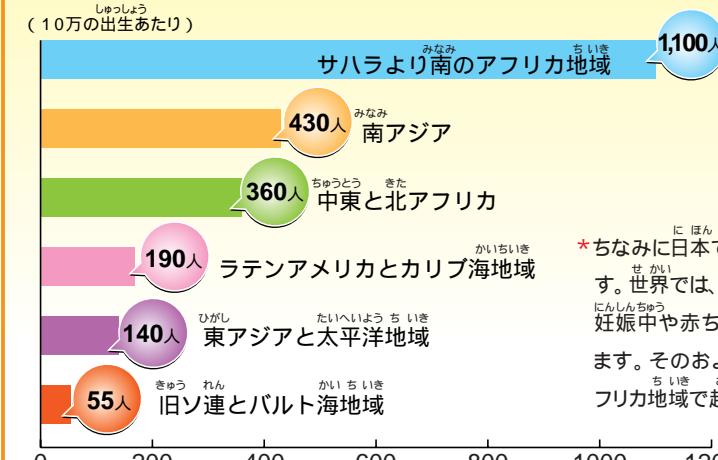
57パーセント

男の子

43パーセント

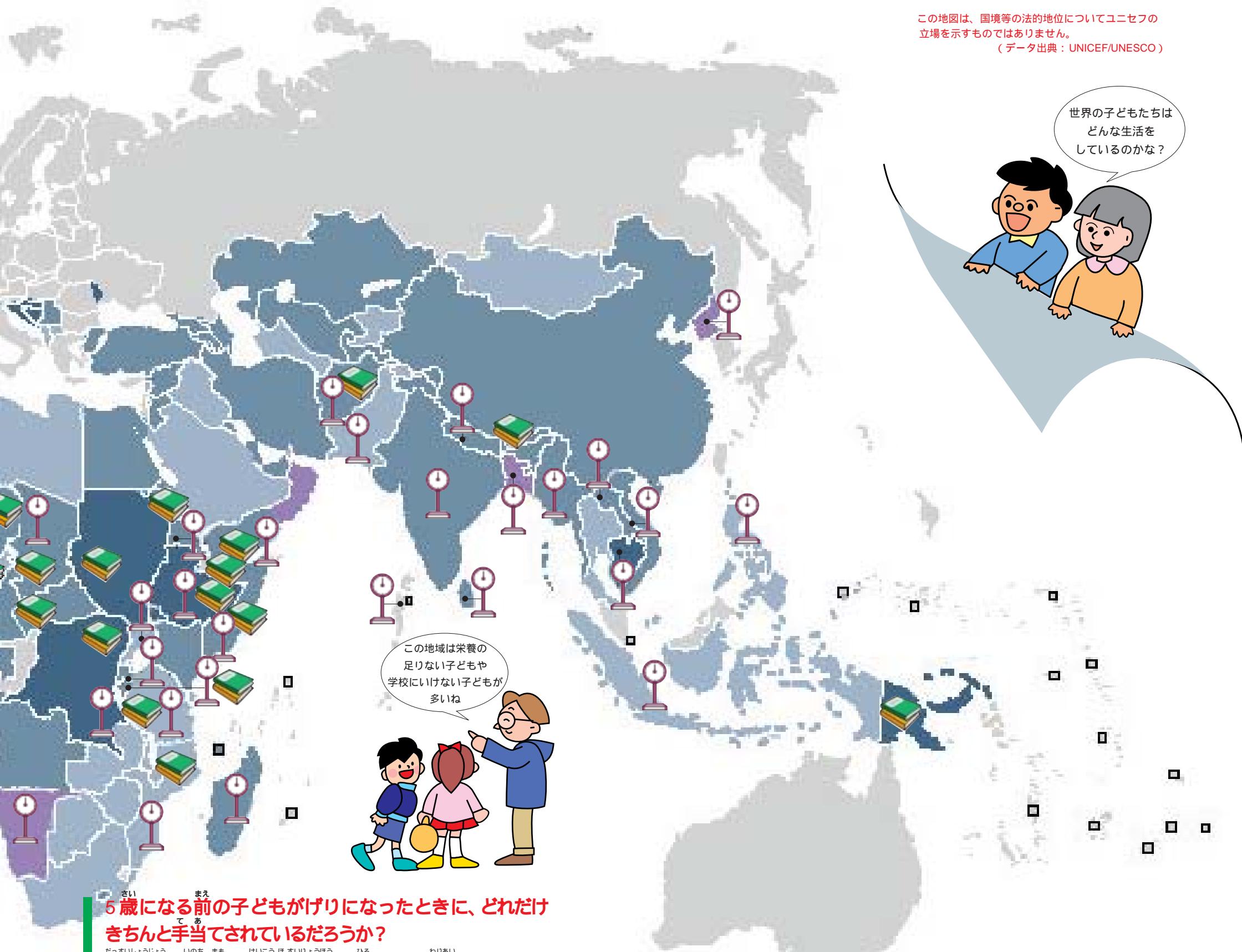
赤ちゃんをうむのは命がけ

10万人の赤ちゃんが生まれるとき、何人のお母さんが命を失っているか(1995年)
(10万の出生あたり)



*ちなみに日本では10万人の出生あたり8人です。世界では、毎年515,000人のお母さんが、妊娠中や赤ちゃんをうむときに亡くなっています。そのおよそ半分が、サハラより南のアフリカ地域で起こっています。

この地図は、国境等の法的地位についてユニセフの立場を示すものではありません。
(データ出典: UNICEF/UNESCO)



5歳になる前の子どもがげりになったときに、どれだけきちんと手当てされているだろうか?

脱水症状から命を守る「経口補水療法」が広まっている割合 1995-2000



タンビールが元気になった わけ 経口補水療法

バングラデシュのある農村。3歳になったばかりのタンビールは、今朝から元気がありません。遊び相手をしていたおねえさんのユレカが、お母さんに言います。「タンビールったら、げりしてるわ」お母さんはタンビールのようすを見ると、ユレカにお湯をわかつように言ってどこかへ出かけていきました。

30分ほどしてどってきたお母さんは、わかつたお湯をボールにうつしてさまし、小さな袋に入ったものをとかしいされました。

「お母さん、それなあに?」ユレカがたずねます。「経口補水塩っていうの。このまえ保健センターの学習会でおそわったよ。げりをしている子には、これをきれいな水にとかして飲ませると、脱水症状を防いでくれるんですって。だから



©UNICEF/HQ97-0331/Shehzad Noorani

今、保健センターでもらってきたのよ」「脱水症状?」「げりで体から水分がいっぱい出でてしまうと、そうなってしまうの」

こう言いながら、お母さんはタンビールにスプーンでさっきの水を飲ませはじめました。朝ごはんのときは食欲がなかったタンビールも、おいしそうに飲んでいます。「あとは、あなたにお願いできるかしら? ゆっくり飲ませてやって」そうユレカに言うとお母さんは食事のしたくをはじめました。今日のタンビールの夕食は、豆をすりつぶしたものとゆるいおかゆです。ココナッツジュースも飲んでいます。

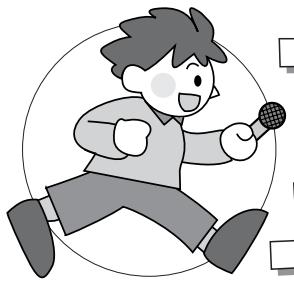
3日後、ユレカの後を追って元気に走り回るタンビールの姿がありました。



経口補水塩は「スポーツドリンクのもの」と同じようなもので、体に対して水分の吸収をよくするはたらきがあります。安全な水を使えないなどの理由から、開発途上国では、げりはよくおこる病気です。食べさせなければげりが止まるのではないかと考えたり、げりのときの水分や栄養のとらせかたを知らなかったりして、その結果、子どもが脱水症状になり、ひどいときには命を失ってしまうことがあります。

経口補水塩やジュース、おかゆなどで水分や栄養分をおぎなう方法を経口補水療法といいます。バングラデシュにはこの療法が開発された国際下痢研究所があり、半数以上の人々がこの療法を知っています。知識を広めることが、子どもの命を守ることに直接つながっています。

INTERVIEW

きしゃ
子どもネットワーカー記者
ユニセフスタッフにインタビューアフガニスタンの
子どもたちは今

昨年9月から急に注目されるようになったアフガニスタン。空爆、難民キャンプの子どもたち、やっと平和が訪れつつある人びとの生活...毎日、テレビや新聞のニュースがどんどん変わるアフガニスタンのようすを伝えています。

アフガニスタンではこうして報道されるずっと前からきびしい状況がつづいていました。23年にわたる内戦、3年にわたるかんばつ。十分すぎる苦しみを受けていたのに、世界はそれをすっかり忘れてしまったかのように無関心でした。

いま、アフガニスタンではようやく平和がうまれつつあります。3月23日から新学期には、178万人の子どもたちが3000の学校にもどりました。しかし、あれはてた国をもういちどつくりなおし、子どもたちのくらしを“ふつう”的な状態にもどすためには、まだ気が遠くなるほどの道のりが待っています。

今回、6人のユニセフ子どもネットワーカー記者が、アフガニスタンに深くかわって活動してきた2人のユニセフスタッフにインタビューをしました。こたえてくださったのは、昨年12月までユニセフ・アフガニスタン事務所ではたらいでいた勝間靖さんとアフガニスタンのとなりの国、タジキスタンのユニセフの事務所ではたらく塙尾雪絵さん。おふたりはどんな話をしてくださったのでしょうか。

アフガニスタンってどんな国?

Q アフガニスタンには戦争と破壊のイメージがありましたが、先日インターネットでカブール美術館の展示の写真を見て、壮大で壮麗な文化財がたくさんありました。

A:(勝間さん) アフガニスタンの周辺は東方の文化と西方の文化が交流する交差点みたいなところだったんです。仏教がギリシャの彫刻や哲学と出会って、ガンドーラ仏像という最初の仏像がつくれました。世界中から仏教の教えを学びに人びとが集まつたんです。

(塙尾さん) タジキスタンにも世界で一番大きな涅槃像があります。シルクロードはいろいろな文化が交差するところですから、知られざる発見がたくさんあるんですよ。

Q 「空爆前のアフガニスタンは治安がよかった」という話を聞いたのですが、本当ですか?

A:(勝間さん) もともとアフガニスタンは治安が悪かったのですが、タリバン*が政権を担うようになってから、いきすぎなほど規律をきびしくし、それを全国的に広げたので、治安がよくなり人びとは喜びました。でも、生活がよくならない。病院もないし井戸もない。それに、「女性は動いてはいけない、教育も受けはいけない」など禁止することが多くて、人びとの期待はどんどんうすれていったと思います。

*タリバン: イスラムの法をきびしく守って社会を正していくうとする「イスラム原理主義」をかけたアフガニスタンの勢力。1996年にアフガニスタンの政権を担った。盗みにも手足を切断するきびしい罰を科したり、イスラムの法を守らない人を取りしまる宗教警察がおかれていた。



アフガニスタンの女性は差別されているの?

Q アフガニスタンで女性はどのような地位にありますか? アフガニスタンでは男性が女性を虐待していて、女性差別の象徴のように報道されていますけれど...?

A:(勝間さん) 私たちから見ればイスラムの女性の社会的地位は低いと思います。ただ、一方的にひどい女性差別のある国だというのはまちがっていると思います。タリバンの時代に女性はブルカ(頭からすっぽりかぶって姿をかくすような衣服)を着なければなりませんでした。今では義務ではなくなつ



現在、ユニセフ駐日事務所のプログラム・コーディネーター。世界各地で開発協力にかかわる現地調査の仕事をしたあと、1998年からユニセフ。2001年12月までユニセフ・アフガニスタン事務所のモニタリング・評価担当官をつとめる。9月のテロ事件のあとは、パキスタン国内のユニセフの事務所から、アフガニスタンへの緊急支援活動にとりくんだ。



たのに、まだ着ている人が大勢います。理由はさまざまですが、ブルカを着ること自体は大したことではないと思っているようです。それは、彼女た

ちが着たいか着たくないかにまかせるべきことです。
“完璧な社会はこういうもの”と、示せるものはないと思うんです。アメリカが完璧とも日本が完璧ともいえないですよね。だからその国の人びと、アフガニスタンの女性が自分の社会をつくっていかなくてはなりません。ユニセフやほかの国際機関が協力して、できるだけ女性が社会に参加できる機会を提供しようとがんばっていますよ。

(塙尾さん)(アフガニスタンやイスラムの社会では)実際は日

常のさまざまな場面でお母さんが大きなパワーをもって子どもたちを守っています。子どもを世話し育てるには、お母さんの判断が一番大切ですから。

アメリカやほかの国をどう思っているの?

Q アフガニスタンの人びとはアメリカや日本に対してどんなふうに感じていますか?

A:(勝間さん) 旧ソ連がアフガニスタンを侵攻したこともあります。アメリカとロシアに対しての反感はあります。日本に対してはいい感情をもっているんですよ。よく話題になるのが「ヒロシマ・ナガサキ」です。原爆を落とされて立ち直った国として尊敬されています。アフガニスタンの人びとはプライドがありますから、本当は援助をうけたくない、自分たちでできるものならやっていきたいという強い気持ちを感じます。

Q アメリカ軍が空爆の時に食糧を投下しましたが、どのように受けとめられたのでしょうか?

A:(勝間さん) 自分の国でみんなが食べているものだから喜んでもらえるだろうと思って届けても、必ずしも喜ばれるわけではありません。大事なのは現地の人の食生活を勉強して喜んでもらえるものを届けることです。

(塙尾さん) アメリカ軍が投下した食糧がタジキスタンに流れ

てきたことがあったのですが、中にあったチョコレートはすぐになくなってしまったけれど、だれもピーナッツバターには手をつけなかったらしい、という話を聞きましたよ。

報道されたことは本当のこと?

Q 各国のメディアの報道のしかたと、実際に現地を見て、感じたことを教えてください。

A:(塙尾さん) アメリカのCNNは、「今回の事件で私たちは被害者だから、中立の立場には立てない」といって、テロ事件の犯人とされたアルカイダの悪いところばかり報道しました。逆にカタールのアルジャジーラという放送局は空爆の被害を伝えました。それで報道の内容がメディアによってまったく違うことが世界中にわかってしまったのです。ひとつのメディアから情報を「それがすべて」と思ってしまうと他の意見が見えなくなってしまいます。

(勝間さん) いろいろなテレビの人と会って思ったのは、「映像がないとニュースにならない」ということでした。だからテロ事件直後はアフガニスタンについての報道はほとんどなかつたですよね。タリバンがカメラを入れさせなかつただけで、本当はいろいろなことが起きていたのですが。

(塙尾さん)「メディアは話題性を追求する」ということも感じました。タジキスタンで地震があり、一部の村が倒壊したことがありました。たまたまアフガン難民の取材に来ていたマスコミがいたので、「近くの地震の現場も見てほしい」って言つたのですが、「それには興味がありません」と言わされました。人びとが苦しい状態にあるのはどちらも同じかもしれないのに。だからすべてを知ることはむずかしいですね。

子どもたちと学校

Q 難民キャンプで子どもたちはどのように過ごしていますか?

A:(塙尾さん) タジキスタンとアフガニスタンの国境にある難民キャンプでは、人びとはテントではなくて、泥づくりの壁にわらで屋根をふいた家に住んでいます。学校も同じよう



Profile

勝間靖さん

現在、ユニセフ・タジキスタン事務所の所長。青年海外協力隊やUNHCR(国連高等難民弁務官事務所)で仕事をしたあと、1995年からユニセフ。モンゴル、コソボ、マケドニア、モンテネグロでの勤務をへて、昨年9月から今の仕事に。アフガニスタンの危機のときには、国境をはさんでアフガニスタンへの支援の最前線にたつた。



す。わらのマットを敷いて座り、机やイスはありません。男の子はあしを取ったり、女の子は家でお母さんのお手伝いをしたりしてはたらいています。

(勝間さん)詩をよむ文化があるので、詩を書いたり朗読したり暗唱したりして、みんなの前で発表していますね。男の子は干しレンガを作ったり、女の子は井戸へ水くみに行ったりもしています。



Q 教育制度が整えられると、どんなことが変わりますか? タリバンの時代には「ソ連兵が10人いて4人殺したら何人残るでしょう?」などの問題を出す教科書を使っていたと聞きましたが。

A:(勝間さん)ユニセフはアフガニスタンの教育の指導者とカリキュラムの改正や教科書の内容を変える活動をおこなっています。ユニセフが支援している学校ではもう新しい教科書が使われています。地雷が1つ地雷が2つなどと数えていた教科書も、りんごが1つ、りんごが2つ、と数えるようになります。タリバンの時は絵や写真が禁止されていたので、理科などが勉強しにくかったのですが、今は絵を入れた教科書を使っています。

Q 国外に逃れた難民の子どもたちが教育を受けることは認められていますか?

A:(勝間さん)たとえば、パキスタンに難民として出てきて難民キャンプに入るためには、正式にはパキスタン政府による難民登録が必要です。ただ実際には登録されないままの人も多く、そうするとパキスタンの学校に行くことはできません。イラン側でもそれは同じです。イラン人はペルシャ語を話すので、ペルシャ語を話せる人はイランの学校でも学べるけれど、言葉ができないと学校には行けません。だからユニセフが中心となって、難民キャンプの中にアフガニスタンの子どもたちのための学校をつくり、勉強できるようにしています。

Q これまで、現地の子どもとどんなことを話しましたか?

A:(杔尾さん)私はよく「大きくなったら何になりたい?」

インタビューを
終えて…

ネットワーカー記者の感想

「戦争が終わったら学校」というところへ行ってみたい」新聞に載っていた少年兵の、学校の存在を別世界のものとしてとらえていたようなこの言葉は、私に教育の重要性を認識させてくれた。そのこともあり、私は教育と子どもの生活について質問した。印象に残ったことのひとつは、数え方の話だった。カラシニコフや地雷などを使って、数を数えることを学ぶというのとてもショックだった。単なる道具のように思わず、使う人は引き金をひくだけ、埋めるだけ、と殺人の意識そのものを失わせるようなことだと思った。質問できなかったことも多いが、この取材は私にとって有意義な時間となった。アフガニスタンの子どもたちが心から笑うことのできる日が早く来る事を願う。

(大鳥由香子 16歳)

今回「記者」を通して、たくさんのことを知ることができたし、とても貴重な体験ができたと思います。まず自分は、アフガニスタンの状況についてあまり分かっていないと気付きました。まだまた勉強不足です。勝間さんと杔尾さんはとても気さくで、強い意思を持つ人だと感じました。私もそんな芯を持つ人になればいいなと思います。また自分の意思を伝えることの大切さ、なにごとも自分から進んでとりくまなくてはだめだということを痛感しました。今地球には苦しんでいる子どもがたくさんいます。私はそのことが頭では分かっているのに、本当に理解できていません。「今自分にできることは何だろう」とあらためて考えさせられました。その実現に向かってこれからがんばっていきたいと思います。

(信末慶子 15歳)

と聞きます。学校を訪問するとみんな自分からノートを見せてくれます。「何の教科が一番好き?」とも聞きますね。

(勝間さん)「先生になりたい」と答える子が多いですね。

子どもたちをどう支えるか

Q 両親をなくしたり、はなればなれになったりした子どもはどのように生かしていますか?

A:(勝間さん)アフガニスタンでは、おじさんやおばさん、おじいさんやおばあさんが一緒に大家族で住んでいて、とても家族のつながりが強いです。子どもの両親が死んでしまっても、おじいさんとおばあさんを中心とした、家族のだれかがその子どもの面倒をみています。親類や家族とまったく連絡の取れない子どもはあまり多くないですが、だれとも連絡の取れない子どもには里親のようなかたちで面倒をみてくれる人を探します。

Q 子どもに対しての心理的なケアとはどんなことですか?

A:(勝間さん)内戦がつづいていたため、半分以上の子どもは、親類のだれかを殺されていて、とても心が傷ついています。ユニセフは現地の団体と協力して子どもたちがレクリエーションを楽しんだり、遊んだりできる環境づくりをしています。

おそろしい地雷

Q 地雷は子どもにどんな影響があるんですか?

A:(勝間さん)アフガニスタンに埋まっている地雷や不発弾はおよそ1000万個あります。サッカーをしていて、ボールが野原のはずれにとんでしまって。野原には地雷がどこに埋まっているのか分からないので、あぶなくてボールを取りに行けません。ガスがないので、食事をつくる燃料にまきを使いますが、まきを拾いに行って地雷を踏んでしまうこともあります。安全なところには、ここは大丈夫という印があるのですが、印がないところではいつ地雷にあうかわからない。恐れもあって精神的につらいし、自由に遊ぶこともできません。



アフガニスタンへ運ばれていく支援物資 ©UNICEF/SN-10-02-B-17A

Q

地雷を取りのぞくのに費用はどれくらいかかります?

A:(杔尾さん)地雷を取りのぞくための技術を持った人に来てもらうなどの活動資金を入れたら相当な金額です。

(勝間さん)ハイテクを使った地雷を除去する機械はお金がたくさんかかります。一番安いのは金属探知機でさがす方法ですが、作業する人にとって一番あぶない方法です。

Q

今は、ラジオなどで地雷のことを知らせているそうですね。

A:(勝間さん)地雷があることは知っていても、いろいろな種類があることを知らない人もいます。おもちゃの形をした地雷もあるのです。地雷の形や種類も伝えることが大切です。

さいごに

Q これまで仕事をしてきて、一番印象に残っていることは何ですか?

A:(杔尾さん)私はモンゴルで2年半ほどはたらいたことがあるのですが、遊牧民の人びとがくらす広大な草原で、おじいさんとおばあさんと住んでいた10歳くらいの男の子に会いました。10キロくらい行かなければとなりの人もいないような場所で、大草原のまんなかで育つ子どももいる、こういうふうにくらしている人もいるんだなと、何だか感激しました。

(勝間さん)私は2002年3月23日からアフガニスタンの子どもたちが堂々と学校に行けるようになったことに感激しましたね。



「私の行くところではなぜか戦争が起っちゃうんです。」笑いを誘う杔尾さんの声には何ともいえない強さがありました。大きな危険があぶよ中での援助活動、現地の悲壮感などみじんも感じさせずどんな質問にも笑顔で答えてくださった勝間さん。お二人ともとってもかっこよかったです。世界にはさまざまな問題があります。暗いニュースを目の前にして宗教や人種の違いを超えて理解し合うことは本当にできるのか、いつも思います。でも今回の取材を通して、私はやはり世界の、アフガニスタンの「明日」を見てみたい、信じたいと思いました。明日を生きるわたしたち子どもにもできることはたくさんあるのではないかと思います。ぜひこれからユニセフ子どもネットでさまざまな活動をしていきたいと思います。

(みしまちあき 16歳)

アフガニスタンのことは、とても遠い国のことだと思っていました。勝間さんの話を聞いて眼からうろこが落ちる感じがしました。蛇口をひねれば水がでること、スイッチを入れれば電気がつくこと、温かい食事、すべてのことに感謝の気持ちがわいてきました。アフガニスタンでは、4人にひとりが5歳になる前に死んでしまう現実、地雷が1000万個も埋まっている安心して歩けないこと、アフガニスタンのことを知れば知るほど援助が必要なことが分かりました。同じ人間としてぼくのできることは何か考えてみた

(中野俊 12歳)

勝間さんと杔尾さんは、戦争のある所にいた人じゃないみたいに優しくて強い人でした。アフガニスタンの子どもから見れば、日本は食べるものも何でもあるぜいたくな生活をしているんだなあと思いました。クラスでも世界で苦しい生活をしている子どもたちのことを話してみたいと思いました。何が問題で、どうすればいいのか考えて行動して、みんなが一緒に立ち上がり、わたしたちは世界を変えることができるのだということを教えてくれました。同じ星に生まれた世界中のともだちが安心してくらせるように夢を実現したいです。

(宇津木亜衣 9歳)



今回参加してくれたネットワーカー記者。アフガニスタンで「こんにちは」を意味するポーズで。前列左から、新田くん、勝間さん、杔尾さん、大鳥さん、宇津木さん、中野くん、信末さん、三島さん

インタビューを終えて感じたことは、「ユニセフスタッフは笑顔が似合う」ということです。勝間さん、杔尾さん、ほんとうにたくさんわら笑っていました。お二人とも、僕たちが暗くなってしまうような話題でも、明るく話してくれました。こうして、ユニセフハウスを実際に訪れて、ユニセフの方々とお話をさせていただいて、ユニセフ活動について理解が深まったと思います。また、他のネットワーカー記者のみんなと知り合って、みんなのやる気をもらい、これからも、じともかづこうもりあおもおも地元の活動を盛り上げようと思いました。

(新田真之介 15歳)

REPORT & INFORMATION

各地域での学習会の報告

北海道

場所 (財)日本ユニセフ協会 北海道支部

日時

3月9日(日) 13:00 ~ 16:00
子どもの権利条約について調べたことの発表
ユニセフビデオ「水と子ども」を見る
ビデオを見ての感想
今後の活動についての話し合い
次回の学習会について

日時

4月2日(火) 13:00 ~ 16:00
子どもの商業的搾取とは何か?

当日のプログラム

私たちにできること
感想・意見交換
今後の活動について



九州

場所 福岡サンパレス第一会議室

日時

4月1日(月) 11:30 ~ 17:00
自己紹介 討論のチーム分け
チーム内の作戦会議
子どもの権利条約についての学習会
討論ゲーム(アフガニスタンの子どもが
食べ物を盗んだら罪?)
九州の子どもネットの活動について

当日のプログラム

関東

場所 (財)日本ユニセフ協会 2階会議室

日時

3月28日(木) 10:30 ~ 16:00
自己紹介
ユニセフってなあに?
食糧問題に関する発表
感想・意見交換
自分たちに何ができるか考えよう
次回の学習会について

4月27日 14:00 ~ 16:15
自己紹介 & フリートーク
ワークショップ「新しい惑星への旅」
新しい惑星にはじめておりたつことになつたそれぞのグループ。
地球から何を持っていくか考えます。
あ! 事故があつて、持っていくものをへらさなければなりません。どうしても持っていくもので最後まで残るのは一体どんなものでしょう?
「権利」って何だろう、話し合い

当日のプログラム

関東の学習会(3月28日)では、食糧問題について調べてきたことが発表されました。

食糧が十分ではなく、栄養が足りていない人びとは、アジア、アフリカの国に多いということが分かりました。そして、人びとが貧しいのは仕事がないからです。自給自足しようとしてもすべての人が自分の土地を持つているわけではなく、種を買うお金もありません。世界的にみれば、世界中の人が十分食べられるだけの食糧を生産しています。どうしてその食糧がみんなにいきわたらないのかを考えました。その裏には貧困があるようでした。裕福な人の裏には、苦しんでいる人がいます。助けるためにできることを私達は考え、それを行動に移すことができればいいと思いました。

須賀 知佐子 13歳

お知らせ

ユニセフ子どもネットニュースNo.2 ネットワーカー記者募集

子どもネットニュースの次号のインタビューでは、現在ユニセフ本部の事業資金部で上席事業資金担当官をしていらっしゃる久木田純さんにお話をうかがう予定です。久木田さんは3月までユニセフ・バングラデシュ事務所の副代表をされており、日本人ユニセフスタッフの中でも長いキャリアを持つベテランスタッフです。バングラデシュのほかモルディブ、ナミビアなどではたらいでこられました。ネットワーカー記者は4~5人募集します。応募者が多いときは、抽選または選考のうえ、みなさんにご連絡します。ネットワーカー記者をやってみたい、という人は下の欄にあることを書いて、郵便、ファックス、電子メールで送ってください。

しみきりは、6月28日(金)必着です。
インタビューの日は、7月なかばから後半の土曜日または日曜日を予定しています。ネットワーカー記者の交通費は日本ユニセフ協会が負担します。



1. ネットワーカー番号
2. 名前
3. 学年(年齢)
4. 住所、電話などの連絡先
5. 久木田さんに聞いてみたいこと(3つ以上書いてください)

ユニセフ子どもネットワーカーが オリンピックに出たよ!

2002年2月25日、ソルトレーキシティで開かれた冬季オリンピックの閉会式で、世界から集まつた8人の子どものひとりとして、ユニセフ子どもネットワーカーの吉田実花さん(12歳)が、オリンピックの旗を運ぶという大役をはたしました。吉田さんは「第2回子どもの商業的搾取に反対する世界会議」に子どもの代表として参加し、それがきっかけとなつて参加することになりました。



©UNICEF

お問い合わせやもうしこみは

ユニセフ子どもネット事務局

(日本ユニセフ協会 広報室)

住所: 〒108-8607

東京都港区高輪4-6-12

電話: 03-5789-2016

ファックス: 03-5789-2036

電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp



北海道の学習会(4月2日)では、横浜会議の成果を話し合いました。

吉田倫哉くんの報告を中心、子どもの商業的搾取の問題についてくわしく話し合った北海道の学習会では、最後に自分たちにできることを考え、次のような意見がました。

- 少しども多くの人びとに知ってもらい、加害者を生み出さないようにする
- 政府に必要な資金を国際機関やNGOに出すよう求める
- 子ども買春・子どもボルノ禁止法の見直しに参加する



学習会のお知らせ

関東

日時: 6月22日(土)午後1:00 ~ 午後4:00
会場: (財)日本ユニセフ協会 2階 会議室

今回の会議では、今まで子どもネットがやってきたこと、これから何をやりたいか、話します。(呼びかけ人: 綱野合亜人)
関東地区以外に住んでいる人も参加できますが、交通費は参加者の負担です。はじめてでもいいじょうぶです。
学習会に参加を希望する人は「関東学習会(6/22)参加希望」と書いて、ユニセフ子どもネット事務局まで、ネットワーカー番号と名前、学年(年齢)を伝えてください。郵便でもファックスでも電子メールでもだいじょうぶです。(できるだけ前日までに申し込んでください。会場までの地図がほしい人は「地図希望」と書いてください。)

オリンピックに行って

私とオリンピックの旗を持ったほかの

7人の子どものうち、5人は里子に行っていたり、ずっと戦争をしている国の子どもであったり、戦争で親をなくした子であったり、私たちから見ればとても幸せとはいえない状況の子どもたちばかりでした。でも8人は家族のように仲良くなることができました。

私は「もしこれが世界の縮図であったら、戦争

もおこらず、みんなが

家族のように仲良く

すごせるのに」と思い

ました。(吉田実花)



だい かい こ しょうぎょうてき せい てき さく しゅ はん たい せ かい かい ぎ
第2回 子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議

ユニセフ
子どもネット

▶第2回世界会議に集まつた子ども・若者代表たち



◀本会議に先立つておこなわれたワークショップに参加する代表たち

子どもの商業的性的搾取って何だろう?

報告者: 銀野合里人 (15歳)

もし自分がいやがっているのに、毎日毎日薄暗い部屋でおとなに自分の体をもてあそばれたら…。もし「お金あげる」といわれて、こころないおとなにとられた自分の裸の写真がインターネットなどで世界中に広まり、ずっと残ってしまうとしたら…。もし、自分の体がお金で売り買いされてしまうとしたら…。自分の心も体も深く深く傷ついてしまいます。このように、子どもたちの体をお金で買って、心と体を傷つけることを、「子どもの商業的性的搾取」といいます。

子どもにはそんなことから守られる権利がありますが、今、その権利が守られているとはいえない。そこで、そんなことをゆるしてはいけない、という思いを持った世界中の人たちが集まって、6年前、スウェーデンのストックホルムで「第1回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」が開かれました。

その後、より多くの人がこの問題があることを知り、少しでもなくしていくことをする活動が世界中で高まりました。ある国では法律がつくられて罪を犯した人をつかまえたり、裁いたりできるようになり、ある国ではこの問題についての調査がおこなわれ、被害を受けた子どもたちが心や体の傷をいやすことができる施設や仕組みが整えられたりするようになりました。

しかし、それから5年がたった今も、問題はまだ残っています。世界はどう変わったのか、これからは何をしていけばいいのか、もう一度、世界中のひとびとが集まって考え、話し合う場をつくろうと横浜で開かれたのが、「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」でした。そして、こうした世界会議でははじめて、子どもと若者が、世界からきたおとなたちと、この問題について、今までのこと、そしてこれからのことを持ち合ったのです。

▶本会議中に子ども・若者代表が行ったラウンドテーブルには高円宮妃殿下やスウェーデンのシリビア王妃、ユニセフのキャロル・ベラミー事務局長も出席しました。



報告

第2回世界会議で
**子ども・若者代表が
アピールしたこと**

報告者: 田代準之介 (13歳)



本会議最終日に子ども・若者代表全員でアピールを発表しました。

会議で、子ども・若者の参加者がおこなったアピールのだいじな点として、次の4点があげられると思います。

- 被害にあった子どもだけではなく、加害者のことも考えたこと
 加害者への厳しい処罰と必要な場合のリハビリをすすめること
 加害者がどうして子どもを性的に搾取するのか、くわしい調査によって
 その動機や背景をはっきりさせること
 この問題にかかわる国際文書を批准すること
 国内の法律を整備すること
 この問題にかかわる活動に十分な予算を配分すること
- 政府が積極的に参加することを要望したこと
 この問題にかかわる国際文書を批准すること

2001年12月17日~20日、横浜で「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」がひらかれました。この会議には、136か国(35か国)から93名の子ども・若者代表をはじめ、3000人以上の関係者が集まりました。子ども・若者代表は、世界会議がはじまる前の14日から川崎で合宿生活を送り、いっしょにアピールをつくりあげました。本会議の最後で発表された子ども・若者代表による最終アピールに、会場は大きな拍手と感動で包まれました。

この会議に日本の子ども代表として16人のユニセフ子どもネットワーカーが参加しました。代表となったネットワーカーたちは、8日間、いろいろな国の人たちと、時には涙をながすほどのはげしい議論をし、時にはだきあい、全力で会議にとりくみました。

今回は、代表としてこの会議に参加したネットワーカーたちから、この会議についてそれぞれのテーマで報告してもらいました。

子ども・若者代表は何をしたか?

報告者: 長谷川有里 (17歳)

私は子どもと若者の声を届けるために、多くの国から集まつた参加者と情報交換をしました。おたがいの国の現状、問題、対策など、貴重な話し合いができます。一言で子どもの商業的性的搾取といつても、地域によって問題のかたちは異なり、それぞれに合つた対策をおこなわなければならないことを実感しました。私たちはおとなたちに何を伝えたいのか、どのようにアピールしていくか、子どもと若者の間で話し合ってきました。

会話はすべて英語でおこなわれました。もちろん通訳が入っていました。子どもの商業的性的搾取を解決するという、同じ目的を持ったなかたちだから、言葉の壁はすぐに乗り越えられると考えていました。でも、スケジュール通りにプログラムが進まなかつたり、言葉の違いで全員に内容が伝わらなかつたり、やってみなければわからなかつたことがたくさん起きました。

そんな問題があったにも関わらず、会議が成功したのは、参加者が子どもの商業的性的搾取の解決に強い思いをそれぞれ抱いていたからだと思います。そしてその思いを、劇におどりに、歌に、言葉にして、私たちの方法で、世界に伝えました。この会議で世界の思いはひとつになりましたが、それでこの問題が解決したわけではないということを、しっかりと受けとめなくては、と強く思いました。「みんなで考えた約束を、次は実行する時なのだ」

この会議に子どもが参加したことの成果

報告者: 田代竜太郎 (14歳)

子どもの商業的性的搾取の根絶に向けて、子どもが参加することの重要性が認められた第1回世界会議から5年、第2回世界会議で、子どもが正式な出席者として参加することが実現しました。これは前例のないことで、会議の進め方も完全ではなかったけれども、採択された文書や、子どもによる具体的なアピールなどはどれもすばらしいものでした。そのほかに具体的によかったと思うのは次の3点です。

- 子どもの意見をおとなたちに伝えることができたということ。この問題の被害者は子どもです。同じ「子ども」の考えを伝えることができたのは大きな成果でした。
- 国際会議に子どもがおとなと対等な立場で参加しているというほかとはちょっとちがつた特徴がある会議だったので、マスメディアの注目を集めることができたのではないかと思います。これは、より多くの人にこの問題のことを知ってもらおうよいチャンスになったと思います。
- 子どもによるアピールに、今後すべきことを具体的に書いたこと。

このアピールは国連子ども特別総会で国連文書となりました。

今後の活動の大きな原動力になるでしょう。

3. 教育の重要性を認めたこと

子どもの商業的性的搾取、子どもの権利条約、HIV/エイズについての教育を世界中で広めること

被害にあった人には社会復帰のための特別な教育をおこなうこと

4. 今までの宣言文などにはなかつた新鮮で具体的な提案が行われたこと

「子どもの商業的性的搾取 若者基金」の設立を提唱したこと

「子どもの商業的性的搾取国際デー」を設けるように勧告したこと

このようなアピールはこの会議に多くの子どもたちが参加できたからこそ生まれたと思います。この点で、今回の会議における子どもと若者の参加はとても意義があったと思います。

あずま 東 さやか 15歳

「世界会議に参加した感想」

私は世界会議に参加して、言葉と年齢の壁の高さを知りました。また、その壁を乗りこえることはかんたんではありませんでした。私たちが共通の目的を達成するために何度もぶつかり合いました。多くの異なる若者や子どもが集まると、まずおたがいのことを理解するだけでもたいへんなことで、みんなで目的達成のために話し合うことはさらにむずかしいことであることが分かりました。しかし、多くの異なる若者や子どもがそういう困難を乗りこえてつくったもののすばらしさや、それが持つ力の大きさを知り、多くのおとなに大きな感動を与えるということも知りました。おたがいを理解し、言葉や年齢の壁がだんだん低くなっていくといいなと思います。そのために私はこれから多くの言葉を学び、多くの国の文化や考え方を学んでいきたいと思っています。



かい ぎ さん か かん この会議に参加して感じたこと、考えたこと

私が会議に参加するまで抱えていた不安は言葉の壁で他の国の代表の子とうまくコミュニケーションがとれるかということでした。それが心配でたまなくて、言葉がなくても楽しめる割れないシャボン玉とか、いろいろな小道具をたくさん準備していましたけれど、そんな物は必要ありませんでした。なぜなら言葉が少しくらい通じなくても、最高の友達ができたからです。

アヌーはネパール代表の14歳の女の子です。彼女も英語を勉強中で、私たちは英語があまり話せないどうし、簡単な英語やジェスチャーや絵でおたがいの家族のことや、おたがいの国の言葉や文化などを教えてもらいました。仲よくなっていくうちに言葉以上に心で会話できるということが少しずつわかつてきました。日本語でしか人と接したことがない私が、言葉ではないもので人と接したというのはすごく新鮮なことでした。そして私の中の何かが変わった気がします。

「言葉が通じても心が通じなければ問題は解決できない」そんなことを私に気づかせてくれた会議だったと思います。

やの 矢野 由理子 15歳

「会議に参加して感じたこと」

くろしま 黒島 清香 17歳

私の中で今回の会議はたいへん貴重なものとなった。期間中、起きているあいだじゅう、子どもの商業的性的搾取の問題に触れているというは、搾取の経験のある私にとって大きな挑戦だった。また、言葉や文化、年齢、経験の違いからもめたことも多々あり、私自身、言葉の分からない中での話し合いは本当につらかった。けれども、子どもの商業的搾取という同じ課題に立ち向かう仲間である。試行錯誤をくりかえすことでひとつになり、子どもの商業的搾取根絶への新たな一步が踏み出せた。子どもの商業的搾取はおとなにとっては一瞬の快楽だろうが、子どもにとっては一生の苦しみである。しかし私は、サバイバー(被害者)は、苦しみとともに痛みを知るからこそ問題に立ち向かっていける強さを持っていると思う。子どもの商業的搾取は根絶できるだろう。なぜなら、その根絶を望む仲間が世界中にいるのだから。

かんが この会議に参加して感じたこと、考えたこと

私がこの活動を始めたのは、あるテレビがきっかけだった。その日、女優の東ちづるさんがドイツの平和村を訪れた。平和村には、自分の国で戦争があり、地雷や兵器で傷ついた子ども達の身体と心の治療をするところだった。その時の映像が、私の心に「何か自分のできることをしたい」と思わせた。そんな時、母が「ユニセフ子どもネット立ち上げの新聞記事を教えてくれ、私はすぐ参加した。学校の休みを利用して何回か勉強会に参加して、今こうして文を書いている私がいる。『横浜会議』を通して、国内だけではなく海外の人とも交流でき、「たくさんの仲間」ができたことが、自分のこれから行動の道しるべとなったり、自信につながった気がする。またもう一つの活動「エイズ撲滅」もこのことに関係していると知ったので、そのことにもがんばろうと思った。横浜会議代表者として、ユニセフネットワーカーとして、この活動がひとりでも多くのだれかの心に「行動」の灯をつけられますように。

こころ な か
「心に投げ掛けられたこと」

なかむら 中村 翔也 11歳



売られていく子どもたち

サヌータのおはなし

サヌータが、生まれ育ったネパールの小さな村をはなれたのは2年前、

13歳のときでした。山がきれいに見えるいつも真っ青な空に包まれた、うつくしい村でした。サヌータの家族は朝から晩まで畑に出て米や作物をつくり、サヌータの毎日は、家畜の牛の世話、小さな妹や弟の世話、水くみやまきひろい、食事をつくるてつだい、と休む間もありません。家族のくらしはまったく楽ではありませんでしたが、それでも、サヌータは家族とくらすのが楽しかったのです。

そんなある日、同じ村に住むおばさんがサヌータの家族に話をもちかけました。

「サヌータももう13歳になるよ。今さら学校に行かせるつもりもないなら、働き口をみつけたほうがいいよ。サヌータだってちゃんとお金をかけぐさ。仕事をおぼえればサヌータのためにもなるだろうし、あんたたちのくらしだって楽になるだろう。町に行けばいい仕事をあるよ。紹介してあげてもいいんだよ。」

家族はサヌータを遠くへやるのは心配でしたが、同じ村の人の話だし、だいじょうぶだろうとかんがえて、サヌータにこの話をしました。サヌータは、まだ行ったことのない大きな町がとってもすてきなところのように思えて、いいよ、と答えました。おばさ

んは、「サヌータがこれからはたらく分だよ」と、お父さんにいくらかのお金をてわたしました。

サヌータが連れていかれたのは、インドの大都市ボンベイでした。期待に胸をふくらませていたサヌータ。その思いは最初の日に無残にひきちぎられました。

サヌータは、うす暗い家に閉じこめられて外に出ることもできず、毎日、つづつとあらわれる見知らぬ男の人にいやらしいことをされる、じごくのような生活を送らなければならなくなってしまったのです。同じ家には、サヌータと同じくらいの年の女の子がたくさんいました。中にはサヌータとちがうことばを話す子もいました。

サヌータもほかの女の子も、どんなに泣いても叫んでも、だれもたすけにきてくれませんでした。それどころか、泣いたり逃げようとしたりすればひどくなぐられました。

15歳になったころ、サヌータはとても具合が悪くなり、その家を追いだされました。サヌータはエイズという病気を引きおこすウイルスに感染してしまったのです。今、サヌータは同じような被害にあった子どもたちがいっしょにくらすセンターにいます。あまりにも悲しすぎて、サヌータはあの家にいたあいだのことを話そうとしません。ただ、村に帰りたいといって、ときどき泣きま

す。でも、サヌータには村に帰る体力も、お金も、何も残っていません。そして、村に帰っても病気のサヌータは家族の重荷になってしまふことをサヌータは知っているのです。センターの先生は、そんなサヌータといっしょに、ときどき歌を歌います。そしてサヌータはきまって「もうわたしあんな女の子がいないようにしてね」と先生に話すのです。



サヌータのようにだまされて、インドの都市で商業的性的搾取を強いられているネパール人の女の子の数は1年間に5000人~7000人にもなるといわれています。

ユニセフは、子どもがゆうかいされたり、売り買われたりしないよう、警察と協力したり、読み書きができる女の子にもわかるように歌をつかってメッセージを伝えたりしています。

ひとりでも多くの子どもたちが、自分の人生を自分でえらぶことができる日が来るように...。ユニセフも努力をつづけています。

